

紀 要

第 20 号

2007. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

犬上郡所在 檜崎1号墳の研究

—「畿内型石室」をめぐる考察—

細川修平

はじめに

滋賀県の横穴式石室研究にあって、所謂「畿内型横穴式石室（以下「畿内型石室」）」は特別な意味を持って語られる。これは畿内型石室に一定の政治性を読み取ろうとする方法に関連するが、現実的には「非畿内型石室」の強固な個性と特徴的な分布状況に関連する。

例えば、「正方形プラン・窮隆頂持ち送り石室」は天津市北郊地区に特徴的に分布するが、天津市堅田地区における畿内型石室と対比することによって、古代志賀郡域における在来倭人と渡来氏族との住み分け政策を傍証する状況とされている（水野正好1969）。そこには「畿内型石室」は在来倭人という無条件の前提が存在する。湖東地域における階段式石室と畿内型石室の場合も同様である。

確かにそれぞれの横穴式石室が異なる系譜に位置する点は確かであり、また、特徴的な分布状況についても否定し難い。しかし、「畿内」地域においても横穴式石室は5世紀末頃に朝鮮半島から導入されたもので、6世紀代においても古墳毎に個性的存在で、せいぜい幾つかの系統に分けることができる程度である（増田一裕1996）。しかし、これらの横穴式石室は同一の変化の方向性、すなわち「巨大化」を共有し、この目的達成のために類似した構造変化を展開する。それ故に畿内型石室と言う漠然とした幻想が成立し、「在来倭人」や「政治性」というイメージが付与されているのが事実であろう。

本来ならばこの畿内型石室の定義を検討し、然る後に具体的な分析を行うべきところであるが、小論では湖東地域における畿内型石室の一つである檜崎1号墳の横穴式石室をテキストとして、畿内型石室の問題を抽出し、意義について予察する。

1. 多賀町檜崎1号墳の横穴式石室

檜崎1号墳は滋賀県犬上郡多賀町檜崎に所在する。犬上川の形成した扇状地の頂部左岸に檜崎—外輪—金屋南—池寺と連続する古墳群（以下「檜崎・池寺古墳群」）の一基である。古墳群は扇頂部から勝楽寺山麓にそって、約1.5km×0.7km程度の範囲に広がる。甲良町に跨って古墳が分布することや、多くが埋没古墳となり現状把握が困難な状況から、幾つかの古墳群に分かれて扱われているが、檜崎古墳群や金屋南古墳群の試掘・発掘調査の結果からすれば、本来一つの古墳群を形成していたと判断できる。その墓域は現下之郷川や上之郷川の起源と考えられる旧河道左岸に沿って設定されており、西方に連なる横枕古墳群や、犬上川下流側の北落古墳群などと区別できる。発掘調査の結果

から見れば、総数150基程度からなる古墳群と予想する。

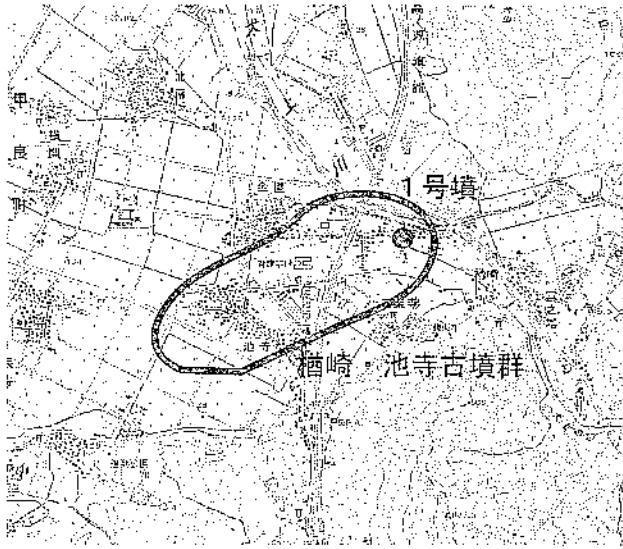
1号墳はその最高所付近に所在する。周辺に分布する古墳の大多数が削平・埋没古墳化していた状況にあって、唯一墳丘を完存させることから類推できるように、古墳群の中で「目立った」古墳の一つであり、周辺地区の発掘調査の結果からみても、古墳群形成の契機となった古墳と理解できる。墳丘は径15m、高3.5mの円墳とされているが、横穴式石室の規模からすれば、径20m級であった可能性が高い。横穴式石室は、S-77°-Wに開口し、現存長10.6m、玄室長6.0m、同幅1.9m、同高2.9mの右片袖の平面プランである。玄室容積33立米で、近在の横穴式石室では最大級になる。出土遺物からTK10期、6世紀中頃の築造年代とされているが、遺物量は少なく確証はない。むしろ、類似するプランを有する5号墳ではTK209期、外輪1号墳ではTK43期の築造である点からすれば、MT85からTK43期の築造と考える。畿内では二塚古墳後円部石室から藤ノ木古墳頃までに取まるだろう。

さて、この1号墳石室については「典型的な」畿内型石室あるいは「通有の」横穴式石室と理解され、付近に展開する階段式石室との対比が強調される。さらに石室の対比がそのまま被葬者の対比に転化され、「中央から派遣された指導者」と「渡来系技術者・作業員」と両者の差異を説明する方法まで存在する（川田政晴・山田友科子1991）。果たして、檜崎1号墳の被葬者は「中央から派遣された」人物であり得るのだろうか。

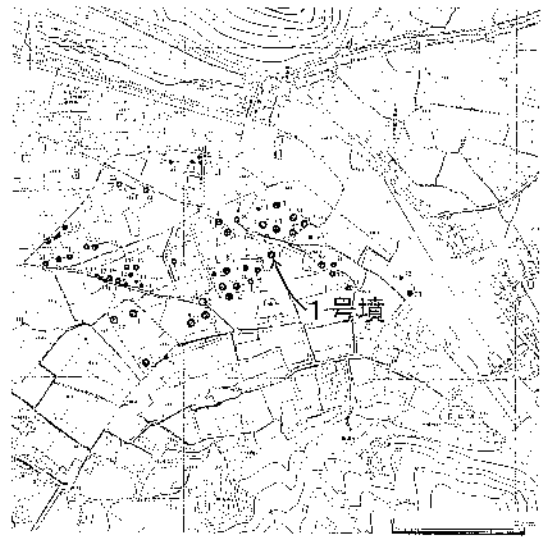
詳しく横穴式石室を観察すれば、幾つかの個性を指摘することが可能である。

1点目は平面プランである。1号墳石室は玄室奥幅1.39m、玄門幅1.39mで、開口部の羨道幅も1.39mである。この数値からも判明するように、1号墳石室の基本プランは幅1.39mの無袖石室であり、これに袖石を付加することによって右片袖プランに変更している。事実、左側壁は玄室から羨道を通してほぼ直線状に連続するが、玄室右側壁は奥壁から玄門方向に「ハ」字状に広がる。通常の畿内型石室では奥壁と袖部で玄室幅を決定させるが、ここでの奥壁は玄室幅の決定に関与せず、開口部幅に規定されたにすぎない。玄室幅を決定しているのは、付加的に配置された袖部のみである。独特な平面プランの決定方法で、畿内型石室には見られない特徴と言えるだろう。

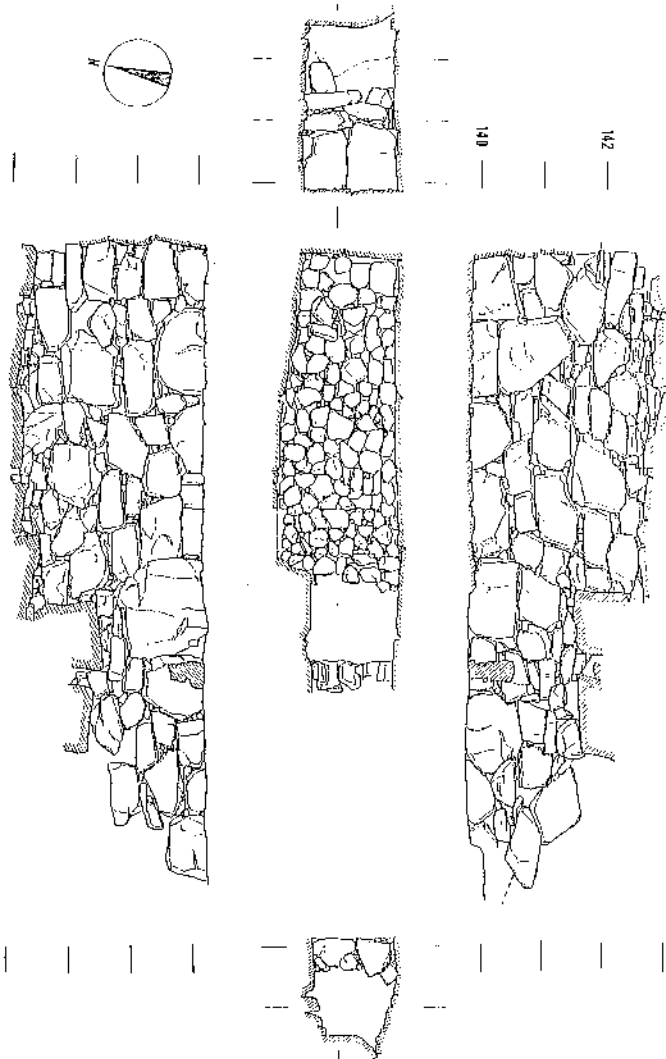
2点目は奥壁の構造である。その最下段基底石は中位の石材2石を縦位に据えており、その石材の高さは側壁の2段目に一致している。また、この2石はほぼ同一の大きさで、玄室の中央において分割された形状となっている。奥



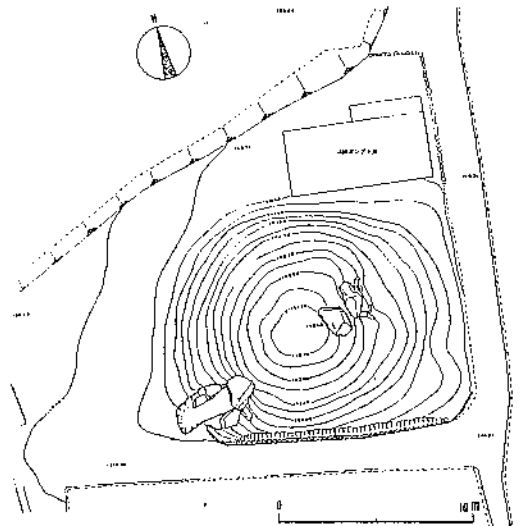
榑崎 1号墳の位置



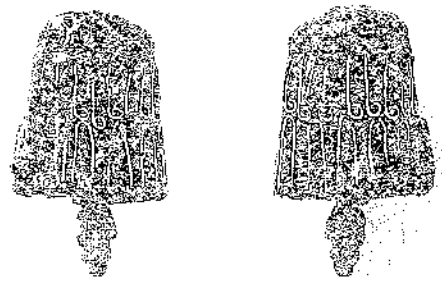
榑崎古墳群分布図



榑崎 1号墳 横穴式石室 実測図



榑崎 1号墳 墳丘 測量図



参考 榑崎27号墳出土 轡尻金具

図1 榑崎・池寺古墳群

壁第2段目以上においても、石材は横積みとなっているが、基本的に2石構造で、左右の石材を交互に積み上げている。こうした奥壁基底石縦位2石となる構造は畿内には見られない方法で、檜崎1号墳の大きな特徴と認識できる。

3点目は閉塞方法である。羨道開口部付近には閉塞石の一部が残存しているが、これは小型の石材を縦方向に積み上げたような不自然な状況である。特に玄室側は直線的に面が揃い、あたかもそこには板状施設が存在したかのようである。さらに閉塞石が設置された位置は、羨道天井石第1石と第2石のやや広い隙間の直下である。こうした状況から、この羨道天井石の隙間から床面に板材を固定し、これを閉塞施設とした後に、その板材の外部に小型石材を積み上げたと考えることができそうだ。発掘調査で下部構造を確認する必要もあるが、少なくとも、直線的に積み上げられた閉塞石の状況は、小山状に塊石を積み上げる畿内の閉塞方法とは異なるものと認識できる。

第4点目は袖部構造である。1号墳石室の袖石では大型の石材を縦位に用い、玄門はこの上に平石を一石置いて構成する。この特徴については物集女車塚古墳など畿内において散見でき、6世紀末にはこれがスタンダードとなる。従って、畿内に無い特徴とは言えないが、「門柱石」を意識した可能性も否定できず、檜崎1号墳の特徴としておきたい。

以上の4点が檜崎1号墳の横穴式石室の特徴である。言うまでもないが、断面長方形の立方体状の玄室空間や右肩袖プラン、羨道の存在と平天井などの構造などは畿内型石室そのものであり、中位の石材を目地を通しつつ5段に積み上げる状況も、同時代の畿内の横穴式に類似する。従って、畿内型石室と呼ばれることを否定することができないことも事実である。しかし、細部において畿内の石室では一般化していない特徴が指摘できる点こそ重要ではないだろうか。

2. 檜崎1号墳の系譜

こうした檜崎1号墳の特徴が、どのような系譜に存在するかを考える。檜崎1号墳に先行し、かつ、類似点が指摘できる横穴式石室は、県内では見受けられず、美濃（成瀬正勝1994）、若狭（柳沢一男1991）、伊勢（竹内英昭1995）の地域に存在する。

美濃地域では岐阜県瑞浪市の段2号墳が指摘できる。全長7m、玄室長4.5m、玄室最大幅2mの左片袖式石室で、側壁は小型扁平な石材を積み上げて構築する。TK10期頃の築造とされる。

左片袖式である点は檜崎1号墳と異なるが、平面プランの決定方法が類似する。すなわち、玄門部で玄室幅を設定し奥壁に向かって左側壁が狭くなる。また、羨道幅は奥壁幅よりも若干狭いが、玄室奥壁から直線的に開口部まで連

属する。無袖タイプの石室から変容した片袖プランと認識でき、檜崎1号墳と同様の設計が見取れる。

また、段2号墳の奥壁を見れば、典型的な奥壁基底縦位2石構造となっており、檜崎1号墳と共通する。さらに、扁平な石材を敷き詰めた床面も同様である。

以上の3点において、段2号墳は檜崎1号墳の祖形となり得る可能性が指摘できる。

若狭地域では福井県高浜町の二子山3号墳が指摘できる。TK10期に築造された北部九州系の横穴式石室である。全長6.3m、玄室長4.2m、玄室幅1.5m、玄門部幅0.8mの規模で、平面プランは両袖式であるが、所謂羨道はなく貼石墓道である。また、玄門部の段や框石は形成されておらず、水平床面となっている。

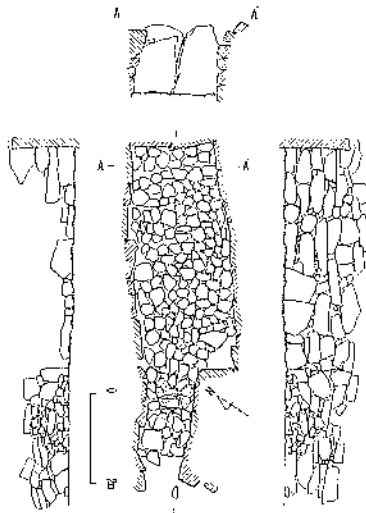
この二子山3号墳の横穴式石室と檜崎1号墳の横穴式石室を比較すれば、幾つかの類似性が認められる。その第1点目は奥壁基底石である。すなわち、横位で設置されているが、ほぼ中央部で分割された2石で、奥壁基底石縦位2石構造の祖形と考えられる。第2点目は玄門門柱石構造で、玄門高より若干低い高さとなる点である。両袖と片袖の差異はあるが、檜崎1号墳の大型石材による袖石との類似性が考えられる。そして、最大の類似点が閉塞方法である。二子山3号墳では、玄門部天井石の開口部直下付近の床面において、羨道を横断する溝状遺構と2基のピットが穿たれており、その開口部側に最下段は平石で、その上部に小型石材が1列に積み上げられている。すなわち、2本の棒を玄門部天井に立てかけ、そこに木板をあてて閉塞とし、最後に木板に沿わせて外部から石材を積み上げた復元されている。これは檜崎1号墳で想定された閉塞方式と同一である。横穴式石室祭儀の本質に係わる閉塞施設における類似点であり、その意義は大きいと考える。

以上、二子山3号墳は北部九州型石室であるが、檜崎1号墳に通じる特徴をもっており、特に閉塞方法の共通は重要であろう。

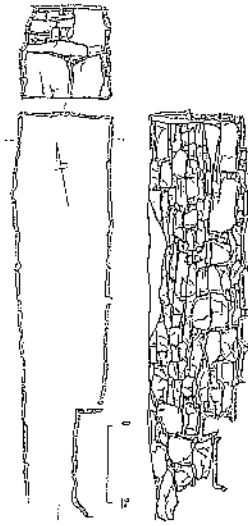
伊勢地域では、旧南勢町に所在する日和山古墳を指摘する。発掘調査は実施されておらず、詳細な年代は明らかではないが、地域で築造された初期の畿内系石室で、石積みの状況から檜崎1号墳に先行するとみて大過ない。全長8.4m、玄室長5.0m、奥壁幅2.2mの規模の両袖式石室である。

推測される築造年代は、「畿内」地域において両袖プランが一般化していない段階であり、この事実から見ても、この石室が完全な畿内型石室ではない事実が窺われる。奥壁基底部は2石の横位石材を用いて腰石を表現しており、奥壁基底縦位2石構造との関連が考えられる。また、袖部についても方柱石材による門柱構造を採用しているが、これについても檜崎1号墳の大型石材による袖石と共通する。

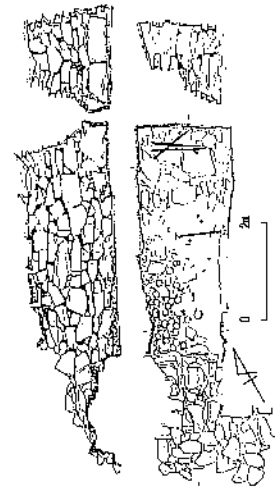
以上、変形した畿内型石室として日和山古墳から檜崎1



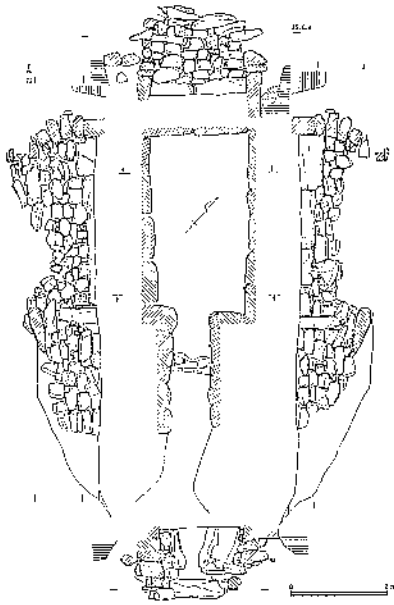
美濃 段2号墳



美濃 中切古墳



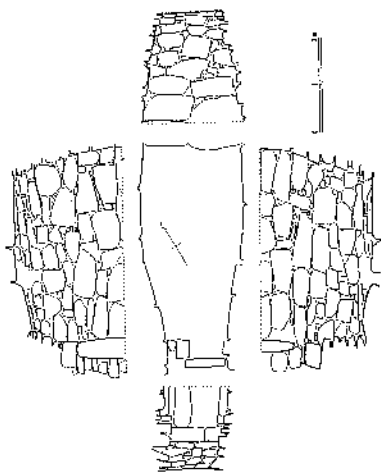
美濃 二又1号墳



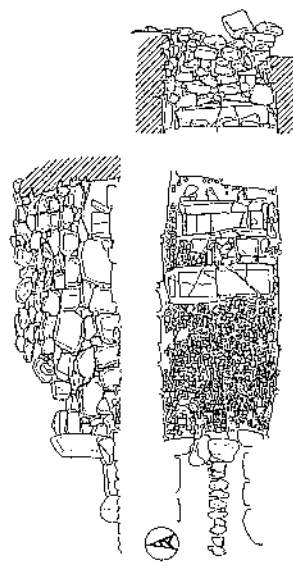
若狭 二子山3号墳



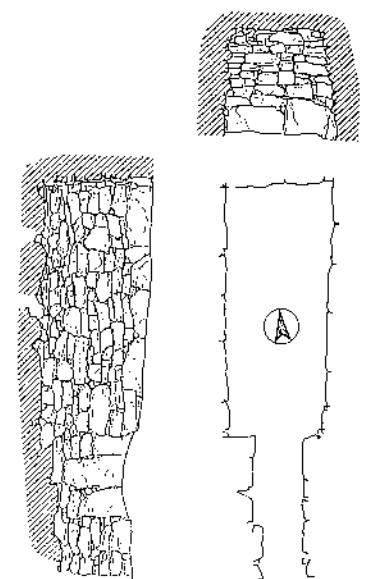
二子山3号墳 閉塞状況写真



若狭 十善ノ森古墳後円部石室



伊勢 井川田茶臼山古墳



伊勢 日和山古墳

図2 楯崎1号墳の系譜

号墳を導き出すことは不可能ではなさそうだ。

このように、檜崎1号墳と全く類似するとは言えないまでも、美濃、若狭、伊勢の地域では檜崎1号墳と共通する特徴を持つ石室を指摘することが可能であり、これらのいずれもが檜崎1号墳の祖形となる可能性を有している。すなわち、これらいずれかの地域から檜崎1号墳の石室が導入されたと考えることができそうだ。

しかし、同時にこれらの地域には共通する特徴が指摘でき、その状況こそが檜崎1号墳の横穴式石室の成立に大きな意味を持っていたと考える。すなわち、若狭地域と伊勢地域は本州中部で最も早く横穴式石室を導入する地域であり、それを基礎に独特の石室文化を形成する。美濃地域についても伊勢地域とともに同じく早期に横穴式石室を採用する西三河地域の影響から、早い段階に横穴式石室を 수용する。すなわち、これらの3地域は畿内型石室に先行する横穴式石室の情報・文化を保有した地域として共通し、しかも、その先行する情報・文化が檜崎1号墳の特徴の遠因となっている可能性である。こうした状況をさらに詳しく考えてみよう。

若狭地域では西塚古墳の竪穴系横口式石室、向山1号墳の北部九州型石室など、5世紀中頃から後半にかけて直接的に九州北部地域から横穴式石室を導入する。しかし、6世紀初頭頃の十善ノ森古墳の後円部石室では、玄室長4.2m、玄室奥壁幅2.0mの右片袖・片羽子板状プランの石室となり、墓道と玄室床面は同一レベルで玄門部に段差は形成されていないなど、北部九州的ではない状況が生み出され、石室の在地化が開始される。同じく、獅子塚古墳においても北部九州の様相の強い石室であるが、右片袖を指向した両袖プランに変質し、在地化が読み取れる。すなわち、若狭地域では5世紀中頃から北部九州地域の横穴式石室の情報を直接に入手し、これによって九州北部地域と同一の石室を築造した。しかし、6世紀初頭頃からは、九州北部地域からの情報のみによって横穴式石室を構築するのではなく、右片袖など「畿内型石室」の情報も入手し、それらを融合しつつ横穴式石室を生み出す状況に変化した。先に見た二子山3号墳もこうした状況で生み出された北部九州的の石室であり、墓道の羨道化や同じく、玄室の長方形指向など畿内型石室的な特徴を見出すことが可能である。

さらに、若狭地域では初期の畿内型石室として行峠古墳が指摘できるが、羨道は短く長い墓道が付属する特徴的な開口部構造である。また、二子山3号墳と共通する「板」閉塞の可能性も指摘されている。典型的な畿内型の大型石室とされる丸山塚古墳についても、奥壁基底石に大型石材を用い「腰石」を表現している。すなわち、6世紀前半頃に築造される畿内型石室には九州的な要素が融合しているのである。

以上、若狭地域では6世紀前半から中葉にかけて、北部

九州系石室が畿内型石室の影響を受けて在地的な変容を生じるのと同時に、北部九州型石室の要素を取り入れた畿内型石室も築造される。言い換えれば、母体となる石室が畿内系でも北部九州系であっても、互いに融合し独特な石室文化を形成したと理解できる。

伊勢地域においても基本的な傾向は同じである。5世紀中葉から後半期にはおじよか古墳や平田18号墳など直接的に九州北部地域から波及してきた横穴式石室を造営するが、5世紀末から6世紀初頭になれば、亀山市井川田茶臼山古墳のように、一見畿内型との印象すら受ける北部九州系の石室を造営するようになる。若狭地域における二子山3号墳と同じである。また、日和山古墳に先行する鳥羽市岩屋山古墳は畿内型とされるが、両袖プランや奥壁基底横位1石による腰石の表現、方柱状石材による門柱構造など、北部九州系を母体とするのか、畿内系を母体とするのかの判断に苦しむような融合型石室となる。さらに、竪穴系横口式石室である平田18号墳の石室に、片袖となる短い羨道を付け加えたツツミ2号墳、平田17号墳、中大谷13号墳と順次「有段式」石室が成立する過程・状況も確認できる。そして、この「有段式石室」が、近江湖東地域に波及し「階段式石室」へと発展する。

以上、伊勢地域では6世紀前半以降、横穴式石室の融合が加速的に進行し、両袖タイプの特徴的な畿内系石室や「有段式石室」など、独特の横穴式石室を生み出す。しかも、それらは南伊勢地域や中伊勢地域など、小地域毎の個性として表出する。特徴的な横穴式石室文化を形成する地域と言えるだろう。

美濃地域では、若狭や伊勢のように直接的に北部九州地域から横穴式石室を導入することはなかったが、西三河地域の影響を受け、5世紀末頃までに竪穴系横口式石室である可児市羽崎大洞3号墳を生み出している。さらに、段2号墳に近い多治見市虎溪山1号墳は右片袖式の有段式石室で、畿内型石室の右片袖プランと竪穴系横口式石室の有段構造が融合したものと理解できる。一方、御嵩町中切古墳は玄門楣石構造を含め市尾墓山古墳の石室を直接的に導入したと考えられているが、奥壁基底は縦位2石構造で、在地的様相が認められる。また上石津町二又1号墳は美濃地域における畿内形石室の初現例とされるが、奥壁最下段は横位の石材を2石並べて腰石状に構成し、奥壁基底縦位2石構造の起源となる。これらの変容した畿内型石室については、畿内から導入されたと考えられるよりも、朝鮮半島から直接導入された可能性も含めて考えるべきだが、いずれにしろ、畿内型石室と北部九州型石室とが融合しつつ、独特の石室文化を生み出している状況が確認できる。

以上、檜崎1号墳の祖形となり得る可能性のある横穴式石室が指摘できた美濃、若狭、伊勢の地域は、いずれも5世紀中頃から後半頃には九州北部地域から横穴式石室を導入し定着させていた。そして5世紀末から6世紀初頭頃に

は畿内系石室の情報を得て、九州北部系統の横穴式石室に畿内的な要素（例えば右肩袖や羨道）を組み合わせた融合型石室を生み出す。同時に、門柱石を意識した袖石、腰石を意識した基底石、両袖プランなど九州北部的な様相をもった畿内型石室も造営される。具体像の表出は地域毎の個性に負う部分が大きいが、これらの地域は、畿内型と九州北部的な横穴式石室を積極的に「融合」させる地域としての文化を共有するもので、本州の中央部での同一の文化現象と認識すべきものとする。

このように、いずれの地域においても榑崎1号墳の石室が生み出される可能性は存在し、さらに考えればこの3地域に開かれた近江地域自体もこの融合型石室の文化圏に含まれ、榑崎1号墳の石室が自発的に生み出される可能性も考えられるのではないだろうか。少なくとも、「畿内型」という言葉に誘惑され、畿内に起源を求め、畿内の影響を考える必要は全く見い出せないのである。

榑崎1号墳に近い年代と考える高島市斎瀬塚古墳は、基本的には「畿内型石室」に分類できるが、石柵・石障・玄門段構造など、北部九州型石室の要素を組み合わせた特徴的な横穴式石室である。隣接する若狭では、先に見た二子山3号墳や行峠古墳など、積極的に畿内型石室と北部九州型石室の融合が進行している地域である。この動向の一端として、「畿内」地域とは無関係に「畿内型基調の融合型石室」がマキノの地に築造されたものと理解できる。榑崎1号墳はより「畿内的な様相」が強いと認識できるが、斎瀬塚古墳の存在は、榑崎1号墳の在り方を考えるうえで、極めて示唆的と言い得るだろう。

4. 近江地域の役割

美濃・若狭・伊勢の3地域が九州北部的な石室と畿内的な石室を融合させ、独特の横穴式石室文化を形成した。そこで問題となる点が二つ存在する、一つはその3地域に開かれた近江地域の状況であり、今一つは3地域への畿内型石室の情報の波及である（田中勝弘1993・丸山竜平1983・細川修平1998）。

結論的に述べれば、近江が畿内型石室の一つの発信源になった可能性が強く、これ故に三つの地域の文化現象は近江を中心として発生した可能性を考える。以下、こうした視点から近江の状況を概観する。

琵琶湖南部地域は早い段階から畿内型の横穴式石室が導入される地域である。TK47期では大津北郊地域で右肩袖長方形プランで持ち送り天井を備える「畿内B型石室」を導入し定着させる。また、この地域では引き続きMT15期には正方形両袖プランで窮隆頂持ち送り天井の横穴式石室を導入し、これを定着させるとともに、「畿内B型石室」との融合を行い独特の横穴式石室文化を形成する（花田勝広1992）。

これにやや遅れて野洲地域においても横穴式石室が導入

される。その初現例が越前塚古墳後円部石室である。大半が埋没しているが、玄室長5.2m、同幅2.8mの右肩袖平天井プランの石室で、扁平な石材を持ち送りつつ積み上げて構築する。TK47からMT15期の築造と考えられる（富山直人1994）。

このように琵琶湖南部地域は近畿地方中枢部とほぼ同じ段階で横穴式石室を導入・定着させている。当初は群集墳クラスでの古墳で採用するが、引き続き前方後円墳においても取り入れる。これらの年代観や石室の個性から見れば、こうした導入期の石室が「畿内」地域からもたらされたと考えられることは不可能であり、朝鮮半島・百済地域から直接的に導入されたと理解すべき存在である。

続く段階では円山古墳・甲山古墳が存在する。物集女塚古墳など定着しつつある畿内型石室から引用されたとも理解されるが、羨道天井が階段状を成す点に畿内的ではない個性が認められる。この個性がいずれに起因するかも問題ではあるが、前段階に独自に畿内型石室を導入した状況からすれば、こうした特徴は自発的に生じた可能性も考えられるだろう。市尾墓山古墳においても、玄門掘石構造が認められるように、羨道天井を玄門天井より高く設定する方法は、導入期の畿内型石室の一類型として存在する。こうした情報を独自に獲得・変容させつつ、円山・甲山古墳の羨道部天井構造が生み出されたと考えられる。木部天神前古墳もTK10期後半頃の横穴式石室で、上部構造は不明であるが当該期の典型的な畿内型横穴式石室の一例である。このように野洲市域では、6世紀前半以降も畿内中枢部と歩調を合わせつつ、独自の横穴式石室を造営する状況が継続する。

湖北地域についても、米原市山津照神社古墳がTK10期に築造された「石屋形」を持つ石室とされ、北部九州的な石室の可能性が指摘されている。また、これに先行する塚ノ越古墳も横穴式石室であったとされる。さらに、長浜地区の垣籠古墳の主体部についても法量的には横穴式石室の可能性が考えられ、阿蘇溶結凝灰岩製の初期家形石棺を納める可能性が高い村居田古墳の主体部も注目される。あるいは、湖北町四郷崎1号墳の正方形プラン石室もこの中に含まれるかもしれない。このように現在確認できる事例は存在しないが、この地域についても早期に横穴式石室を導入している可能性が高く、かつ、野洲地域に匹敵する規模、内容の古墳を造営する。従って、湖北地域も「横穴式石室」の窓口としての機能を果たしていた可能性が強いと考えられる。ただし、現状ではこれが畿内系石室であるのか九州北部地域であるかは判断できない。

こうした近江地域における状況を考えれば、この近江地域こそが、若狭・伊勢・美濃の3地域に対する畿内系石室の情報発信源であり、融合型石室を生み出す契機を形成したと考えられるのではないだろうか。伊賀の事例ではあるが、大山田鳴塚古墳は羨道部天井構造から甲山・

円山古墳との関係が考えられている。また、美濃地域で最初に築造された畿内型石室が湖北地域に隣接する上石津町に存在することも示唆的である。近江地域から伊勢地域へあるいは美濃地域へ畿内型石室の情報が伝わる過程を示す存在とも理解できるだろう。

ただし、近江から若狭・伊勢・美濃への一方的な文化の流出ではない点を確認しておきたい。湖東地域ではTK10期頃から中伊勢地域の有段式石室の系譜を引き次ぎ階段式石室を完成させる。この動向が示すように双方向の文化交流であり、全体として特徴ある融合型石室を生み出す下地となったのである。6世紀初頭から前半という「継体王朝」の特徴（細川修平2006A）を考えるならば、そうした連携が形成されることこそ自然な状況ではないだろうか。

以上、若狭・伊勢・美濃地域という5世紀中葉から後半までに九州北部型の横穴式石室を採用する地域が存在する。その3地域に挟まれた中央、すなわち近江地域に朝鮮半島から畿内型石室が伝わった。これを契機とし、かつ、「継体王朝」期と言う特徴的な政治状況の中で、しかも、横穴式石室の隆盛期前夜にあって、近江を中心とするこれら地域で横穴式石室の融合が発生した。これは技法・外見的な部分では言うまでもなく、閉塞方法などイデオロギイ的な部分でも融合した。その結果、地域毎あるいは古墳毎の個性は存在するものの、全体として融合型石室という一つの文化現象が形成されたのではないだろうか。そして、榑崎1号墳はこうした文化現象の一つの表出として位置付けることができるのである。

5. 階段式石室の系譜と榑崎1号墳

以上、榑崎1号墳の横穴式石室は、近江・若狭・伊勢・美濃における横穴式石室の融合と言う文化現象として生み出された。そこには「畿内地域」は無関係であり、「畿内型」と言う石室形態には大きな意味は存在しない可能性が浮かび上がる。この問題について考える。

榑崎1号墳の周辺、湖東地域に盛行する横穴式石室としては「階段式石室」が指摘できる。現在確認されている最古の事例は愛荘町金剛寺野5号墳で、TK10期の築造である。同じ頃東近江市天狗前10号墳や安土町竜石山2号墳、竜王町三ツ山4号墳など湖東地域一円にこの種の石室が導入され、その後犬上地域から甲賀地域にまでこの種の石室が拡散する。さらに、野洲市天王山古墳前方部石室も「堅穴系横口式石室」とされ、この種の石室の拡散の広さを示している。さて「階段式石室」については奥壁直交葬とする細長いプランと奥壁並行葬も可能な幅の広いプランが存在することから、単独の系譜として存在するものではなく、複数の系譜で導入されたと考えられている（堀真人1997）。確かに前者は蒲生郡など分布の南部に多く、後者は北部に多いという特徴が見られる。しかし、「階段式石室」の祖形と考えられる「有段式石室」自体が、畿内型石

室と九州北部型石室が複雑に融合した石室構造である事実や、さらにその祖形を「有段式石室」に限定せず「畿内型」と「北部九州型」の融合に求めるならば、並行葬と直交葬を敢えて異なる系譜と理解するのではなく、同一の文化現象における表出の差異と認識するべきと考える。

いずれにしろ、「階段式石室」とは「畿内地域」とは無関係な横穴式石室であり、これが湖東地域に導入され、定着・拡散したものである。

一方、榑崎1号墳の横穴式石室についても、地域の中に定着・拡散する状況が確認できる。榑崎・池寺古墳群の内部では、榑崎5号墳を始め、外輪1号墳、榑崎11号墳、榑崎38号墳など、かなりの頻度で奥壁基底縦位2石構造が確認でき、その影響の認められる石室が一定比率で営まれている事実が判明する。また周辺地域においても、塚原13号墳は塚原古墳群では数少ない「畿内型石室」であるが、奥壁基底は横位2石構造である。さらに、小八木塚本古墳、谷川筋1号墳、猪子山56号墳など奥壁基底縦位2石構造は、さらに広い地域で見出すことが可能であり、湖東地域の横穴式石室の一つの類型として定着・拡散している事実は明らかだ。しかも、階段式石室においても奥壁基底縦位2石構造は波及している。すなわち、その分布には恣意的な状況が認め難く、この種の石室が特殊な存在として扱われた状況は見いだせない。言うなれば「階段式石室」の定着・拡散の状況と何ら差異は認められないのである。「階段式石室」と「榑崎1号墳の石室」を区別する理由は、本当に存在するのだろうか。

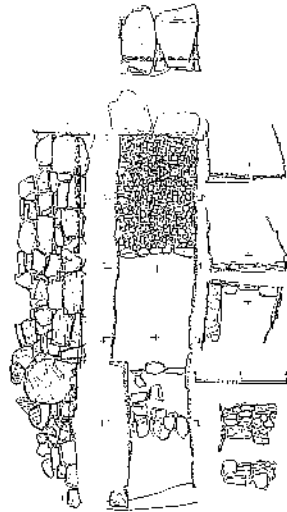
確かに、畿内型石室は東近江市勝堂古墳群など有力な古墳に採用される事例が多い。あるいは、7世紀以降、「階段式石室」は急激に小型化することに対し、「畿内型石室」では大型石室が営まれる点も指摘できる。しかし、「階段式石室」の天狗前10号墳では埴輪が樹立されており、また、7号墳は墳丘規模から見て群の盟主クラスの古墳となる可能性が高い。前方部とは言え野洲天王山古墳では前方後円墳に採用されている。犬上地域の塚原1号墳では装飾甕や鈴脚高坏など特殊な須臾器や太刀などを副葬する。このように「階段式石室」が有力な古墳に採用される事例も多く指摘できる。

一方、湖東地域において7世紀以降に大型の畿内型石室を造営する事例は、勝堂古墳群のほか五個荘町正瑞寺古墳など地域の中核となる古墳であり、特殊な社会的状況を見出す必要が存在する。群集墳や一般の古墳においては、畿内型石室も小型化は否定できず、さらに無袖式石室を導入するなど、決して優位な存在ではない点も確認できる。

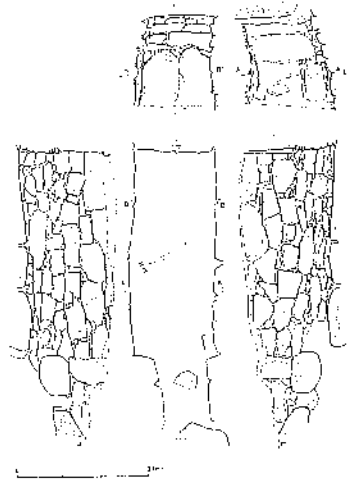
そもそも基底面に高さ2m程度以上の石室を組み上げ、さらに羨道によって外部との通路を確保する「畿内型石室」と、基底面から階段を介して一段低い部分に玄室床面を形成し、また、羨道を付加しない「階段式石室」では、自ずと必要とする墳丘規模に差異が生じるものである。両者の



榑崎38号墳



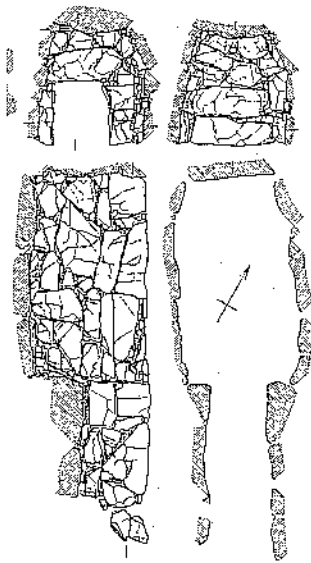
小八木塚本古墳



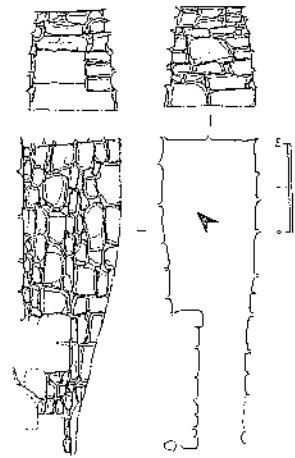
谷川筋1号墳



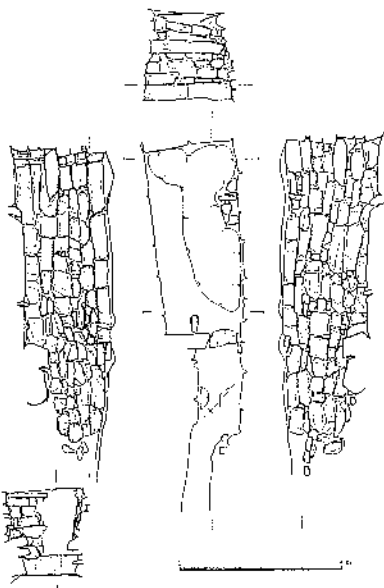
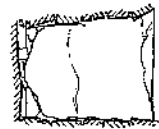
五個荘丸山1号墳



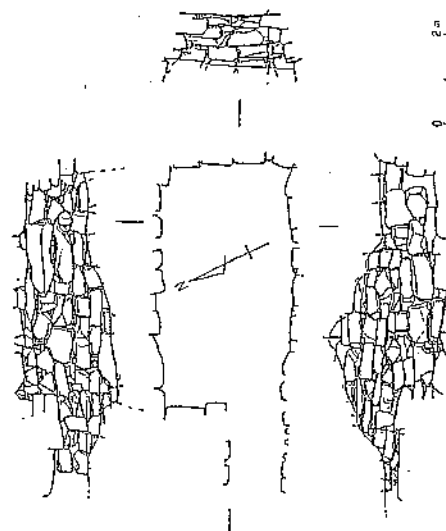
八幡社46号墳後円部石室



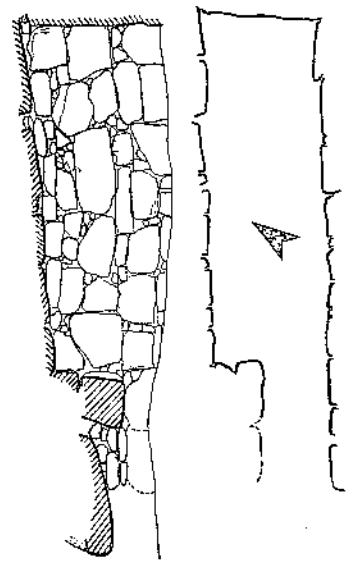
金剛寺野こうもり塚古墳



マキノ齋頼塚古墳



野洲越前塚古墳



勝堂行者塚古墳

図3 榑崎1号墳の展開

差異は考えられているほ大きく無いのが実情であり、その差異を政治性や階層性と安易に結びつけることはできないのではないだろうか。「畿内型石室」と「北部九州系石室」の融合の結果生み出された二つの姿の石室であり、その意味での同値性をこそ評価すべきと考えられる。

4. その他の「畿内型石室」

こうした視点から、さらに湖東地域における幾つかの「畿内型石室」についても概観しておく。

東近江市勝堂行者塚古墳はTK209頃に築造されたと考えられる大型の「畿内型石室」である。しかし、ここでは玄門楣石構造が残存するとともに、奥壁を1枚石で構築するという際だった特徴が存在し、この特徴はおから山古墳へ継続する。「畿内型石室」を構築する代表的な首長墓とされるが、その石室には畿内に見られない特徴が指摘でき、明らかに融合型石室となっている(細川修平2007B)

玄門楣石構造は多くの古墳で確認できるものではないが、奥壁1枚石構造は最近発掘調査が成された多賀町大岡高塚古墳、竜王町オーゴ古墳、竜王寺北1号墳などに見られ、地域の首長系譜に位置する古墳から、群集墳の盟主墳クラスで散見できる。奥壁の巨大さが首長層のステイタスシンボルとなっていた可能性も考えられるが、地域的な拡散と定着を示す点において、基本的には檜崎1号墳石室との差異はない。

金剛寺野古墳群の百塚古墳とこうもり塚古墳では、玄室の石積み方法など「畿内型石室」に含み得るが、羨道天井が開口部方向へ階段状に高くなる点に特徴を持っている。これは大岩山古墳群の円山・甲山の両古墳において確認できる特徴である。羨道床面がスロープ状に傾斜する階段式石室からの影響と理解するのか、玄門楣石構造からの変形と理解するのか、今少しの議論が必要ではあるが、湖東地域の最高首長系譜に採用された石室が他地域に波及・定着する過程を考えるうえで興味深い。

東近江市五個庄丸山1号墳は、陶棺を採用する古墳で、6世紀後半から末頃の築造と考えられている。その横穴式石室は、畿内系とも壜系横口系とも解釈されているが、奥壁は一石構造と言うよりも明らかに腰石を意識した形状で、側壁も同様である。玄門部は楣石構造とともに、楣石を配置し開口部に向かってスロープを形成する。右肩袖プランの大型石室としての畿内型を基調とするものであるが、北部九州的な様相を強く複合させた古墳と認識できる。この意味から檜崎1号墳やマキノ斎頼塚古墳と同様の経緯で営まれた石室であり、この石室構造を特殊化し陶棺と結びつけることはできない。

さらに、胴張り両袖プランの東近江市八幡社46号墳後円部石室も、美濃地域や北伊勢地域と関係する融合型石室と考えられるだろう。

このように、検索事例は多くはないが、その他の畿内型

石室に関しても、基本的には檜崎1号墳と同様に融合型石室の範疇で理解し得る。この状況は、奥壁基底縦位2石構造の影響を認めつつもより畿内型石室的とも言い得る東近江市平柳A-1号墳などについても、これを特殊に扱うべきでは無い事実を示す。すなわち、6世紀代においては有力な古墳を含めても典型的な畿内型石室は存在しない可能性が高い。その意味で檜崎1号墳は湖東地域における典型的な「畿内型石室」であり、一般化し得る存在であると認識できる。

5. おわりに

以上、檜崎1号墳の横穴式石室をテキストとして、近江・湖東地域における畿内型石室を考えた。その結果、畿内型石室は特殊な政治性を帯びた存在ではなく、若狭・伊勢・美濃地域などと一体となって形成された横穴式石室文化の一つの表出であることを明らかにした。これは、湖東地域に発展する今ひとつの横穴式石室である「階段式石室」と同様の存在であり、「畿内型」と言う言葉の幻想性によって、政治性や階層性を内包する概念として扱われがちではあるが、文化現象としては極めて在地的であり、これ以上の意味を持つ存在ではない事実を意味している。

すなわち、小地域の個性など両者の使い分けは確実に存在するが、一方において必要以上に両者を区別することはできない。例えば勝堂古墳群行者塚古墳に葬られた被葬者は、古墳と石室の規模やステイタスシンボルの存在、あるいは立地条件などから地域最高首長層であることは疑いないが、横穴式石室の形式から見限りでは、決して畿内から派遣された人格ではなく、また、畿内と強く関係する人格でもなかった。在地の文化によって確認され得る在地的な人格に過ぎないのである。在地の文化で確認されると言う点においては例えば金剛寺野5号墳と同値であると認識すべきなのである。

こうした状況は、群集墳をはじめとして横穴式石室が急激に拡散する時代背景にあって、その技術を確実に拡散させる上で有効な方法と認識でき、さらに、6世紀における横穴式石室そのものの意味を考えるうえで今後重要な視点になるものと確信する。今回の論考では果たせなかったが、今後横穴式石室そのものの意味を考えることを約しておきたい。

さらに、7世紀になれば畿内における墓制・葬制の序列化が完成するとともに、近江・湖東地域では横穴式石室が全体として小型化・簡略化する。その中でも、畿内の有力古墳との密接な関係を示すような古墳が営まれる。例えば勝堂古墳群赤塚古墳である。畿内における序列の中に地域の首長層が位置づけられた事実を示す。横穴式石室が政治性を帯び、階層・階級を表出する装置になったのである。この段階でこそ「畿内型石室」と言う概念が有効性をもつのである。これについても今回は触れられなかったが、今

後の課題としておきたい。

(ほそかわ しゅうへい：企画調査課 主任)

参考文献

- 1 竹内英昭 1995「三重県の横穴式石室研究」『研究紀要』第4号 三重県埋蔵文化財センター
- 2 田中勝弘 1993「近江における横穴式石室の需要と展開」『紀要』1 滋賀県立安土城考古博物館
- 3 辻川哲朗・山中繁「観音寺山南麓における横穴式石室の一例」『紀要』11 財団法人滋賀県文化財保護協会
- 4 富山直人 1994「畿内における横穴式石室の構築技術と渡来系氏族」『文化財学論集』文化財学論集刊行会
- 5 成瀬正勝 1992「美濃の横穴式石室」『美濃の後期古墳』美濃古墳文化研究会
- 6 花田勝広 1992「渡来人の集落と墓域」『考古学研究』考古学研究会
- 7 細川修平 1998「畿内周辺部における横穴式石室の導入」『斎願塚古墳』マキノ遺跡群調査団・マキノ町教育委員会
- 8 細川修平 2007A「6世紀前半の琵琶湖周辺地域」『考古学論究』小笠原好彦先生退官記念論集刊行会
- 9 細川修平 2007B「勝堂古墳群の造営」『淡海文化財論叢』2 淡海文化財論叢刊行会
- 10 堀真人 1997「近江における階段式石室の検討」『紀要』10 財団法人滋賀県文化財保護協会
- 11 増田一裕 1996「畿内大型横穴石室の技術的展開と歴史的動向」『日本考古学』3 日本考古学協会
- 12 丸山竜平「近江における後期古墳の内部主体の諸相」『丹山古墳』野洲町教育委員会・大手前女子大学考古学研究会
- 13 水野正好 1969「滋賀郡所在の漢人系帰化氏族とその墓制」『滋賀県文化財調査報告書』4 滋賀県教育委員会
- 14 柳沢一男 1991「若狭の横穴式石室の源流を探る」『躍動する若狭の王者たち』福井県立若狭歴史民俗資料館
- 15 用田政晴・山田友科子 1991「群集墳の特質と展開」『多賀町文化財調査報告書』1 多賀町教育委員会

なお、図版については、1・3・15のほか、以下の文献から採録した。

福井県立若狭歴史民俗資料館編 1991『躍動する若狭の王者たち』図録

美濃古墳文化研究会編 1992『美濃の後期古墳』

東海考古学フォーラム三河大会実行委員会・三河古墳研究会編

2001『東海の後期古墳を考える』

愛知川町役場 2006『愛知川町史』

秦荘町役場 2006『秦荘町の歴史』

マキノ遺跡群調査団・マキノ町教育委員会編1998『斎願塚古墳』

野洲町役場 1987『野洲町史』

八日市市役所 1983『八日市市史』

多賀町教育委員会編 2003『植崎古墳群』

北原治ほか 1999「愛知郡湖東町平柳古墳群の測量調査」『紀要』

12 財団法人滋賀県文化財保護協会

文化財保護委員会編 1965『東海道幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘報告書』

編集後記

本協会の紀要が今回で20号を迎えました。ようやく成人式を迎えたこととなります。これを機会に装丁を一新しました。

今回の紀要の内容は、時代区分では縄文時代から中近世まで、また、遺跡や遺構の評価や再検討を含め、遺物や資料の比較研究から考察に至るまで多岐にわたっています。いずれの論文にも、地域の歴史や文化の成り立ちと変容を解明しようとする熱い学究心が根底にあると信じております。

本書が文化財の保護のため、広く活用されることを心より願っております。

(編集担当 M. N.)

平成19年3月

紀 要 第20号

編集・発行 財団法人滋賀県文化財保護協会

大津市瀬田南大萱町1732-2

Tel. 077-548-9780(代)

<http://www.shiga-bunkazai.jp/>

E-mail: mail@shiga-bunkazai.jp

印刷・製本 三星商事印刷株式会社